

No.19 タン・ダ・ウー 「最後の買い物」

Tang Da Wu

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 5月1日付 立川市市報記事より

4月12日、ファーレ立川見学に高円宮殿下が激しい雨の中に来られ、青木市長と住宅・都市整備公団の責任者をご案内した。宮様はこの街が美術によって親しみ深くなったし、今後もこういう試みが市内で広がっていくことが楽しみで、今度は夜、家族と一緒に来たいと語っておられた。

その中で宮様が好きな作品のひとつに、タン・ダ・ウーのバスケットの形をした換気口があった。ウーは戦中の日本領土であった昭南島（現在のシンガポール）生まれで、日本に対して複雑な思いを持っているだろう。しかし彼が日本で作る仕事は、いつも開けっぴろげである。日常使われている籠かごが美しい美術品になってしまう不思議さに感心してしまうのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団（現：UR都市機構）「ミニ通信」より

北川さんから、ビルの外の床から空気が放出されるドライエリアに彫刻を作るように頼まれたとき、私は最初マリリンモンローの像を作りたいと思いました。が、後で彼女のスカートをまくり上げるほど強い空気が吹き出すのではないことを知り、お恥ずかしい限りでありました。私に与えられた場所は、窓の前の高さ5mのまっすぐな壁で、地面から出ているドライエリアは4.5m×1mであり、歩行者がその隣を歩くことになります。

私のスケッチブックに次々と描かれたアイデアには、壁にぶら下がったフライパンがあります。一方の端かが床についており、ドライエリアの素敵な屋根になるとともに歩行者がドライエリアに近づくのを制限しています。

また別のアイデアは、例えば醤油瓶、オリーブオイルやお酢の瓶といった、底のない高さ5mのたくさん（7本位）の瓶の中を空気を通し、同時に歩行者からドライエリアを遮るというものでした。

また、竹の葉で包まれた巨大な5つの米だんごを高さ5mの壁から床すれすれに吊るし、歩行者がドライエリアに近づきすぎないようにするというアイデアもありました。

最終的に、そうしたデッサンの中でもっともこの場所にあっているように思われたのが籐で編んだ買い物かごです。

ドライエリアの真上に置かれ、勿論底は無く空気がうまく抜けるようになっています。

これはまた、人々に、プラスチックの袋ではなく本来の買い物かごを使うように思い出させるものであります。

バスケットの制作は、銅のパイプを編み込んで、溶接もしくは受け口を固着します。

私のいつもの仕掛けは屋外の彫刻では数本の銅のパイプを編み、やがて、空気と天候が作用しはじめ美しい色となっていく、というものです。

残念なことにビルの規制と制限により、銅のパイプの彫刻は許可されず、現在は妥協案としてファイバーグラスで考えられています。

立川市の彫刻プロジェクトは、大変エキサイティングなプロジェクトであり、北川フラムさんは最高のオーガナイザーです。私は多くを彼から学びました。

このプロジェクトに参加できて光栄に思っています。主催者の皆様に心からおめでとうと申し上げます。